



# 多文化共生(マレーシア)

## 東方政策元留学生同窓会(ALEPS)

※1988年に設立された、マレーシア政府により国費支援された東方政策の同窓会組織

会長のイスラミ氏からマレーシアと日本をつなぐ国際交流活動について講演いただきました。



後列右から3番目がイスラミ氏



**report** イスラミ氏による講話は、日本を外側から捉え直す貴重な機会となりました。マレーシア政府は、国の発展のために日本から学ぼうと考え、自国の予算で多くの学生を日本へ送り出してきたそうです。その背景には、原爆投下という甚大な被害を受けながら、復興を遂げた日本の歩みに学ぼうとする姿勢がありました。特に印象的だったのは、マレーシアの人々が歴史を大切にしながらも、日本を「かつての支配国」という文脈だけで捉えていない点です。「昔の日本と今の日本は違う」と明確に切り分け、リスペクトを持って接してくれる姿勢に、過去を乗り越えて未来を築こうとする強い意志を感じました。国際理解の本質とは、相手の国を多面的に理解することで、自分たちの文化をより深く再認識することなのだ、と、イスラミ氏の言葉を通じて痛感しました。



**report** イスラミ氏は、マレーシア人の国民性として「柔軟性」を挙げ、その背景には多民族・多文化の環境で生活することが日常になっている社会的土壌があると語っていました。異なる宗教や文化、価値観を持つ人々と共に暮らす中で、相手を理解しようとする姿勢が自然と生まれ、それが高い適応力や柔軟な考え方につながっているのだと感じました。

また、ムスリム文化への配慮について何を望むかという問いに対し、イスラミ氏は「全面的な配慮」を求めるものではなく、需要が見込まれる場面でムスリム向けの食事に対応するなど、ビジネスの視点を踏まえた現実的な対応が重要だと述べていました。

この考え方は、私がこれまで抱いていた「多文化共生は相手文化に全面的に配慮すること」というイメージを見直すきっかけとなりました。多文化共生とは、相互理解とバランスを大切にしながら、無理のない形で共存していくことが重要であると学びました。



## マラッカ訪問

世界遺産の港町マラッカを訪れ、西洋と東洋の文化が共存する多様性に満ちた街並みを視察しました。



青雲亭/1646年に建てられたマレーシア最古の中国寺院。ハーモニーストリートにある



マラッカキリスト教会/オランダ領時代の1753年に建てられたマレーシア最古のプロテスタント教会



カンボン・クリン・モスク/1748年にインド系のイスラム教徒によって建てられたモスク。ハーモニーストリートにある

**report** マラッカの「ハーモニーストリート」では異なる宗教施設が隣り合い、人々が特別なことではなく日常の一部として、互いの文化を尊重しながら暮らしている様子が印象的でした。現地では、特定の文化に限定されない建築や食文化も見られ、複数の文化が自然に融合していることを実感しました。



### 多文化共生を学んで

外国人の増加により、多様な文化に触れる機会が広がる日本、そして区においては、マレーシアに見られる異文化への寛容さ、シンガポールのように他者を属性ではなく一人ひとりの個人として理解しようとする姿勢が参考になると考えます。今後は、海外派遣を経験した団員が多文化社会での学びを伝える講演を行うなど、地域全体で多文化理解を深める取り組みを進めていきたいです。



## 国際交流体験ツアー

# マレーシア・シンガポール 派遣報告



区では、人類が抱える課題を主体的に考え、積極的に行動できる人材育成のため、区内の青少年を海外へ派遣しています。令和7年12月8日～14日の1週間、公募で選ばれた高校生・大学生・社会人の12名をマレーシア・シンガポールに派遣し、現地の事情調査を行いました。

今号では、団員が現地での施設見学や人々との交流を通じて学んだ「多文化共生」「スマートシティ」「都市開発・環境科学技術」の報告をします。

現地での活動内容や学んだことをまとめた報告書を作成しています。報告書は3月下旬からHPまたは問合せ先の窓口で閲覧できます(無償配布もあり(数に限りあり))。

**問合せ** 国際平和・男女平等 인권課国際平和係 ☎ 03-5211-4165



## 多文化共生(シンガポール)

### ホーカーセンター

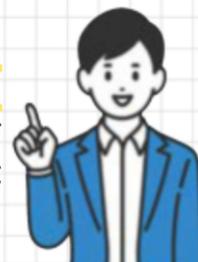
中華、マレー、インドなどさまざまな民族料理が一堂に会するホーカーセンター(屋台村)を訪問しました。シンガポールのホーカーセンターは「多文化都市における料理とコミュニティ・ダイニング」としてユネスコ無形文化遺産に登録されています。



ハラールとノンハラールで食器返却台が分かれている

#### report

ハラール対応や衛生管理が制度として整理されており、文化の違いが摩擦になりにくい構造が整えられていました。理念にとどまらず、運用レベルまで落とし込まれている点が、シンガポールの多文化共生の特徴であると感じました。



### シンガポール国立大学の学生と交流

シンガポール国立大学(NUS)の日本研究会の学生4名と交流を行いました。



#### report

NUSの学生に、日本は今後どのように多文化共生を進めていくべきかを尋ねたとき、「シンガポールで多文化共生が進んでいるのは、幼い頃から海外の人が隣にすることが普遍的(当たり前)だからだ」という言葉をかけられたことが強く記憶に残っています。この経験から、近年外国人住民が増加している区においても、子どもたちが日常的に海外にルーツを持つ人々と出会い、多文化に触れられる機会を創出することが不可欠だと考えました。これまでの国際交流イベントに加え、学校や図書館、美術館などの公共施設と連携し、地域全体で継続的に交流できる仕組みがあるとよいと感じました。「自分とは異なる相手の存在」を当たり前の日常として受け入れられるよう、幼少期から多文化に触れる機会を広げていくことが、今後ますます求められていると考えます。



# スマートシティ(シンガポール)

## ▶▶▶ プンゴル・デジタル地区

シンガポール初のスマートビジネス地区であるプンゴル・デジタル地区を視察しました。住宅・大学・企業が集積した地域であり、都市政策やまちづくりなどの新たな取り組みを検証・実験できる地区です。



大学と企業をつなぐ通路



政府主導で提供される公営住宅(HDB)



プンゴル・デジタル地区にあるダストボックス



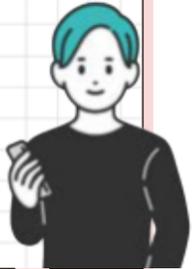
プンゴル・デジタル地区のスーパーに設置されている健康測定機器

report



大学の施設と企業のオフィスが近接して配置されており、学術研究と産業活動が日常的に接点を持つ環境を意図的に設計している点が印象的でした。研究成果を社会実装へとつなげる過程を、物理的な距離の近さによって促進しようとする姿勢が感じられ、人材育成やイノベーションを都市づくりの段階から組み込もうとする考え方が明確に示されていました。

report



シンガポールでは、施策の「目的」や「説明」が明確に示されているため、住民の理解と納得が得られていると感じました。 今回のツアー参加をきっかけに初めて区ポータルサイトを利用しましたが、ウェブ上で多くの行政手続きが完結する利便性の高さに驚きました。駐輪場の利用申請や補助金申請、イベント申し込みなど、身近な手続きを自宅から行える便利なツールであり、ぜひもっと多くの区民の方に知っていただき、活用してほしいと感じました。

report



ダストボックスを通じ、ゴミが地下のパイプを通して自動的に回収されるため、ゴミ収集車が街中を走る必要がなく、環境負荷や騒音の軽減につながっていました。 衛生面でも優れており、安全で効率的な都市づくりが行われていることを実感しました。

また、現地のスーパーマーケットには健康状態を測定できる機器が設置され、測定結果をもとに適した商品を提案するなど、先進的なテクノロジーが生活の中に自然に取り入れられている点が印象的でした。

# 都市開発・環境科学技術(シンガポール)

シンガポールは、限られた土地と資源を最大限に活用し、持続可能な都市開発を進めています。都市開発・環境科学技術に関する施設の視察や講演を通じて、同国の先進的な取り組みやまちづくりの理念について学びました。

## ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ

シンガポール建国当初から進められてきた緑化政策は、「City in a Garden」へと転換し、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイは政策のシンボルとなっています。



## シンガポールシティギャラリー

シンガポールの都市計画や歴史を学ぶことができます。



report

最大の学びは、持続可能性は一つの施策だけで達成されるものではなく、都市開発・環境政策、食や文化など複数の分野が連動することで初めて実効性を持つという点です。現地の事例から、環境配慮が個人の意識や努力に依存するのではなく、都市構造や制度によって「自然と選ばれる行動」として設計されている重要性を学びました。

この視点を踏まえると、都市開発や再開発の段階から環境への配慮を前提として組み込むことが重要だと感じました。建築物や公共空間、移動手段の選択肢、エネルギー利用の在り方を工夫することにより、区民や来訪者が無意識のうちに環境負荷の少ない行動を選べる都市づくりが可能になると考えます。

また、食は誰にとっても身近なテーマであり、飲食の場やイベントを通じて食品ロス削減の取り組みや持続可能な消費の考え方を伝えることで、環境政策を「自分ごと」として捉えてもらう有効な入り口になると考えます。

